

サバイバル・ゲーム

いまやアメリカでは爆発的ブームとなっているサバイバル・ゲームだが、そもそもは80年代初めにアメリカで、牛に目印をつけるペイント・ガンで撃ち合い、誰が最後まで生き残るかという単純なルールの「戦争ゴッコ」から始まった。それがさらに高度な戦略を要求されるゲームに発展して広まり、日本でも83年頃から一部ファンによって行なわれ始めた。

それが今、どーしてウケているのかと推するに、障害物競走、射撃、TVゲーム、などいろいろな複合的要素があり、かつ限りなくリアルな「アウトドア・スポーツ」であるというところが自然指向・過激指向の現代人のニーズに合っているのではないかと思われる。

しかしながら、日本では現在のところ、あまり知られていないし誤解され

ている部分も多いようである。「スポーツ」というより「戦争ゴッコ」のイメージが強いからだろう。早く良くないイメージから脱却して「スポーツ」として広く理解されるべきだと思う。

とは言うものの現実問題のサバイバルを考えると、それどころではない気がしてくる。海外ではテロや暗殺が頻発し、また、国交断絶のまま睨み合いを続けている国々があったりする。最も治安が守られている日本でさえも、過激派のゲリラ事件や航空機内で手榴弾が暴発したり、火山が噴火したりAIDS騒ぎが起こったり……。直接関係しなければ、お茶の間ドラマ感覚かも知れないけれど、いつ何時、何が起るかわからない。現代こそサバイバルの時代だと言えるのだ。

だから、このスポーツ、定着するかどうかよくわからないが日本ではひょっとするかも知れない。なぜならば、我を忘れてやっている、周りから思わす言われそうなのである。

——遊んでる場合ですか!?

収録項目 大項目【趣味・レジャー】

中項目「ゲーム」小項目「ゲーム一般」

参考資料 ビーム・シューティング

あのターゲットを狙え! 『サンデー毎日』74・5・26 / 「サバイバルゲーム」はワイルド度120%のアウトドア・スポーツだ! 『プレイボーイ』84・3・20 / THE SURVIVAL GAME 『月刊コンバット・マガジン別冊』85・5・3 / 他

(C・T)

創刊号切抜帖

週刊テレビガイド

「シャボン玉ホリデー」のザ・ピーナッツ。「ベン・ケーシー」のビンセント・エドワード。「時間ですよ」の天地真理。「コンバット」のビッグ・モロー。「てなもんや三度笠」の白木みゆると藤田まこと。「逃亡者」のデビット・ジャンセン。

「狂った果実」の石原裕次郎。これは、雑誌『週刊テレビガイド』の表紙を飾ったスターたちだ。それぞれの時代にテレビで活躍した顔だ。『週刊テレビガイド』の創刊は、昭和三十七年八月だから、もうかれこれ二十五年になる。

NHKがテレビ放送を始めたのは、もう少し前の昭和二十八年だ。二月一日午後二時、「JOKKY-TV、こちらNHK東京テレビジョンであります」のアナウンスが第三チャンネルから流れた。民放では、昭和二十八年八月二十八日午前十一時二十分に日本テレビがスタートした。その当時は、午前はまったく放送がなく、午後七時半から九時までを中心動いていた。

昭和三十年四月一日にKRテレビ(TBS)が開局。昭和三十四年二月一日日本教育テレビ(テレビ朝日)が放送開始。三月一日にフジテレビが開局した。放送局が増え、放送時間も少しずつ長くなり、番組の内容もバラエティになりつつあった。また昭和三十年代は、週刊誌の創刊ラッシュに始まり、いろいろな娯楽雑誌が生まれた時

代でもある。そんな状況の中に現われたのが、『週刊テレビガイド』である。

「ララミー牧場」で、アメリカ西部の生活を知った。ロバート・フラーのガン捌きに憧れ、銀玉鉄砲で練習したが、音が冴えなかった。「サーフサイド6」「ハワイアン・アイ」で、ハワイとサーフィンを知った。「スーパーマン」を見た次の日、風呂敷でマントをつくり、飛ばうと思ったが田圃に落ちた。やっこの思いで上がって来たみんなが「臭い黄金バットだ」と叫んで逃げていった。「快傑ハリマオ」を見た日、父のサングラスを壊して怒られた。同級生と取っ組み合いの喧嘩をした時、力道山のカラテチョップをやったが全然利かなかった。「青春とはなんだ」を見てラグビーを始めた。「暗闇五段」で柔道をやり、「おれは男だ!」で剣道を始めた。

テレビは、テレビの歴史と共に生きてきた世代の人々に、ある時は夢をある時は悲しみを、喜びを、送り続けて来た。

『週刊テレビガイド』はその親切な案内人だ。

(T・H)